

浄土

monthly
JODO
1996・12



1996 **12** December

日本を美しくする電話

0088



テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ
日本テレコム

お申し込み、お問い合わせはお客様センターへどうぞ。

0088-82 (無料) または 0120-0088-82 (無料) [受付時間: 9:00~23:00 (年中無休)] [インターネットホームページ: <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>]

連載
名刹を訪ねる

撮影・小堀祐二

藤興山廣隆寺



廣隆寺を正面から望む

伝 法然上人自作勢至像



山興寺
廣隆寺



法然上人御真筆といわれる六字の名号



和順婦人会の例会の模様



廣隆寺御本尊と見事な荘厳

花巻鳥谷崎城を救った松子の墓



毎年春のお彼岸に行われる新入学祝いの集い



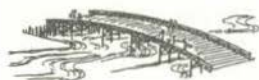
裏山から見た廣隆寺全景



谷地玄雅住職と奥様、そしてお孫さん

浄土

1996/12月号 目次



カラーグラビア 連載〈名刹を訪ねる〉…写真=小堀祐二	
ブッダガヤへの道	江目達雄 8
来迎引接	樋口誠順 16
表紙は語る 野草・花ごよみ	石井敏之 23
名刹を訪ねる 藤興山廣隆寺	真山 剛 24
コラム	31
御法語に聴く	32
うまい野菜と料理の話②	我田 大 36
コラム	43
仏教相談	大室了皓 44
続・午後の日差しの中で	吉川英明 50
コラム	57
子規の庭	大畑 等 58
Jフォーラム	63
事務局便り	69
編集後記	70

表紙題字=浄土門主 中村康隆祝下
表紙撮影=石井敏之
アートディレクション=近藤十四郎

ブツダガヤへの道

成道会に因んで

江目達雄

十二月八日は、成道会です。

成道とは、釈尊が悟りをひらき、仏陀（覺者）となられたことをいいます。そしてその日が、十二月八日であったと、いわれています。

成道会は、釈尊の悟りをたたえ、仏陀の教えがこの世に出現したことをよろこび、かつ、感謝のこころを表わすために、行なわれている法会です。

釈尊は、ブッダガヤの菩提樹のもとで、悟りをひらかれましたが、そこに到る求道の歩みは、苦悩にみちた、きびしい修行の結果であることを、多くの仏伝は記しています。

釈尊の求道の遍歴を、成道会にあたつて、たどつてみることにいたします。

* * *

もうかなり以前のことですが、インドの仏跡参拝に参加しており、ガンジス河の河岸のパータリという町から、ラジギールまでを、バスで走ったことがあります。

パータリは、いにしえのパータリプトラ。マウリヤ王朝（西紀前三一七—一八七）が全インドを制したときの都です。ラジギールは、かつては、マガダ国の首都として栄えたラージャガハ（王舎城）です。

私たちは、街道に沿う茶店に休んで、ミルクティを頼みました。なにしろインドは世界でも有数の紅茶の産地です。私は緑台の赤い毛氈に腰をおろし、熱いミルクティをすすり

ナイランジャー河



ながら、いま走ってきた道をふりかえりました。デコボコの道路、両側は樹林におおわれています。

求道の沙門とられた釈尊は、あるいは、このあたりの道を歩まれたのではなかったのか、私はふとそんなことを思い、樹林に釈尊の面影を感じたようにも思いました。

ヒマラヤ山ろくの釈迦族の太子であった釈尊は、二十九歳のときカピラヴァスツの王宮を脱出、求道の沙門となって、ラージャガハをめざしました。ラージャガハは、政治や経済の中心都市でありましたが、また、思想家や修行者たちが、数多く集っているところでもありました。

カピラヴァスツからラージャガハまでは、六百キロ余りの道のりです。おそらくその道は、暗い密林や炎熱の大地をゆく、苦難の行程であつたでしょう。釈尊は、軒下に食を乞い、樹下に宿りながら、いく日もこの道を、歩まれたにちがいありません。

ラージャガハに到達した釈尊は、マガタ国のビンバサラ国王の目にとまり、その訪問をうけました。

国王は、町の郊外のパンタヴァ山の洞窟に釈尊がいるのを確かめてそこを訪れ、こう申しました。

「あなたは、若く青春に富んでいる。私はあなたに、精鋭な軍隊と財貨を提供したいと

思う。私の申し出を、是非受けて欲しい」

これに対し釈尊は、

「私が出家を決意したのは、欲望を満たすためではありません。出家こそ安穩にいたる唯一の道である、そう考えて、一切を放棄し沙門となったのです」

こう答えて、国王の申し出を断りました。

ビンバサラ王は、修行が完成し、悟りが成就したあかつきには、再びこのラージヤガハに赴いて教えを説いてくれるよう要望し、パンタヴァ山を去りました。

後に、ビンバサラ王は、王妃のイダイケ夫人とともに、深く釈尊に帰依するようになり、仏教最初のお寺である竹林精舎も、建立寄進しております。

釈尊は、このラージヤガハで、二人の修行者に師事しました。

その一人は、アーラーラ・カラマといい、一切の雑念を滅し、何ものも所有するものはないという「無処有処」の境地を説いていました。釈尊は努力して、久しからずしてその境地にたつしました。しかし、満足することはできませんでした。

二人目の師は、ウツダカ・ラーマプッタといい、「非想非々想処」を説いていました。即ち、すべての雑念を滅し、無想にちかい境地をめざすものでした。ここでも釈尊は、その境地をきわめました。これも、正覚への道ではないことをさと、師のもとを去りました。

釈迦がそのもとで悟りを開かれたという菩提樹



釈尊は、悟りへの道を、苦行に求めました。

インドでは古くから、苦行は、聖なる行として、尊ばれていました。肉体を苦しめることによって、神秘的な力がからだの中に貯えられ、神通力を現示することができるようになり、やがて究極の悟りの境地にたつことができた、といわれていました。

苦行を決断した釈尊は、マガダ国を遊行しながら南に下り、ウルヴェーラ村のセーナという部落に入りました。そこには、うるわしい森林があり、清らかなナイランジャー河が流れ、修行にうちこむには、最適の環境でした。

釈尊は、このウルヴェーラの森で、それから六年間（一説では七年間）、きびしい苦行の生活に入りました。

ヨーガの修行による精神統一、ぎりぎりまで呼吸を止める止息禪、断食、あるいは極度の節食などをくり返しました。釈尊の肉体は、目に見えて痩せ衰えていきました。

ガンダーラの「釈迦苦行像」という彫刻を見たことがあります。落ちくぼんだ眼窩、肋骨が浮き出て、骸骨のように痩せ細った体軀、釈尊の苦行のすがたを、リアルに表現しており、鬼気迫る感じです。しかし同時に、苦しみに耐える賢明な精神力をも、この彫刻は訴えているようにも思いました。

「およそこれまで、沙門やバラモンで、きびしい修行を行った人がいたとしても、私の

修行ほど激烈なものは、なかったであろう」

釈尊は後に、こう回想されていますが、こうしたきびしい苦行をつづけても、悟りへの光は見えてきませんでした。

——苦行は、果して悟りへの道なのだろうか。苦行のための苦行でしかないのではないか。

こんな思いが釈尊の脳裏にわいてきて、ついに、苦行を捨てる決意をいたします。

苦行を捨てた釈尊は、ウルヴェーラの森を出て、ナイランジャー河の清流で、身を清めました。

このとき、セーナ村のスジャータという村娘が、乳粥の供養をいたしました。釈尊は、身を清め、乳粥の供養をうけ、体力と気力とを回復することができました。

釈尊は、ナイランジャー河の西岸に移り、河岸近くのピッパラ樹のもとに、たまたま草を刈っていた人から、一束の吉祥草をもらって敷き、

「私^がもし正覚を得ないならば、再びこの座をたつことは、ないであろう」

との不退転の決意をもって静坐し、深い瞑想と思索に入りました。

釈尊が瞑想に入ったとき、悪魔が再三現れては、脅迫したり、誘惑したりしたことが仏伝にのこされています。釈尊の内的な葛藤を、表現しているのでしょうか。

しかし、釈尊は、悪魔との闘いに勝ちました。

瞑想思索に入ってから七日目の夜明け方、明けの明星がきらめいたとき、釈尊は、大いなる悟りにたつし、さとれる者仏陀となりました。ときに三十五歳、十二月八日のことであると伝えられています。

「生は尽きた。清浄の行は完成した。なすべきことはなされた。もはや、かかる生存の状態にいたることはない」

大いなる悟りの自覚は、こう言いあらわされています。

ピツパラ樹は、その樹下で、釈尊が悟りをひらき、菩提を完成されたことから、菩提樹と呼ばれるようになりました。

釈尊がその樹下で、悟りをひらいたという菩提樹は、いまもナイランジャー河のほとりのブツダガヤに亭々と枝葉をひろげていますが、もう何代目かのものと言われています。

菩提樹のもとには、そこに釈尊が座したといわれるところに、金剛宝座が設けられています。

菩提樹と並んで、高さ五十メートル余りのブツダガヤの大塔が立ち、それをめぐって石造の欄楯がめぐらされ、その周囲には、大小のストウパーが奉納されています。

この大塔は、アショールカ王（治世世紀前二六八―二三三）によって精舎が建立され、その後、しだいに増広され七世紀頃には、現在の規模になったと言われています。

私がここにお詣りしたときは、多くの国々の人々が参拝に訪れていました。五体投地という礼拝をくり返す、修行僧のすがたも見られました。

ブッダガヤは、まさしく、世界の仏教徒の聖地でありました。

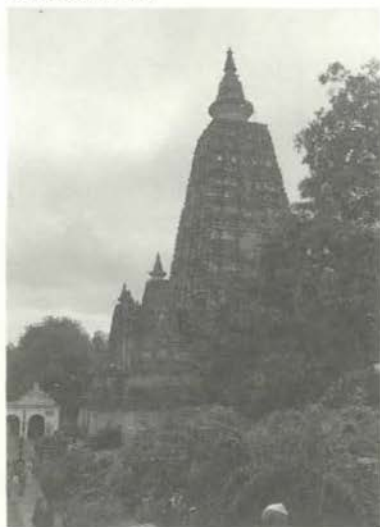
釈尊は、菩提樹下で縁起の法をさとられたと、いわれています。

縁起とは、あらゆる存在や現象は、無数の因（原因）と縁（条件）とが、関係しあって存在するものであり、独立自存のものはない、ということです。

「これは我である」「我がものである」と、私たちは、とかくものにとらわれ、執着しますが、私自身もふくめて、あらゆるものは、因と縁によって生じたものであり、固定的な実体は、存在しないわけです。縁起の法は、あらゆるものが、お互いに関係しあい、生かされ、生きている実相を、しめしております。

（山形・迎接寺住職）

ブッダガヤの大塔



来
迎
引
接

お念仏のお陰をいただいて

樋口誠順

元祖法然上人の一紙小消息に

「諸仏の中に弥陀に帰したてまつるは、三念五念に至るまでみずから来迎したもう故なり」とあります。このみ教えを信じて念仏する私たちは、常に阿弥陀さまをはじめ、諸仏諸菩薩の護念と光摂を蒙り、臨終にはたとえ三べん五へんとわずかな念仏しか申さなかつた者まで、必ず仏自ら来迎し、万事よきように計って、安らかに浄土に連れ帰って下さいます。この御本願を信じて念仏相続いたしましょう。

私の寺のお檀家の長野市川中島の細井音松翁は、九十六歳まで病氣一つせず大変元氣な方でした。しかしその一ヶ月程前、自宅の庭の草むしりをしておられた時に脳梗塞で倒れ、入院先の病院で、七月二十二日夜半亡くなりました。

お宅より二十三日早朝連絡をいただき、取り急ぎ枕経にお宅へ上がったところ、身内の方々が待ちかねて葬儀の相談をしていられるところでした。

すぐ枕経のお勤めをしようとなりましたところ、種々事情があつて枕経の前に急ぎ葬儀の予定を決めてほしいとのこと。翌日二十四日は友引であり、二十五日にどうか葬儀をして頂けないかと懇願されました。

ところが私は二十四日、二十五日の両日、村の人達四十三名を連れて、北アルプスの唐松岳（標高二六二〇メートル）への登山の予定が前々から定まっていた、返事ができず困っていました。

これにはこんな事情がありました。この山行きは数年前の元旦、特に登山の好きな友達のO君、T君の両名が私の寺に挨拶にみえた折、意気投合して計画し、それ以来続いている年一回の山行きなのです。

この村は南原といい、約千軒ほどの集落の集まりです。村の人達に誘いをかけ、日帰り程度の登山会として、毎年北アルプスへの登山を重ねて、その後「南原、山に親しむ会」として発足。村内の年中行事となり、昨年に続き今年は一泊二日で唐松岳に登る計画

となつておりました。

それも今年が一番ベテランのO会長が春から胃腸病にて三ヶ月も入院して、いまだ体調がよろしからずで、山行きは無理。そこへ副会長のTさんも植木の手入れ中、はしごを踏みはずして怪我をして、脚を引きずり引きずり歩く始末で、頂上まではとても無理ときているから、参与の役の私は立案者の一人としても責任者にならざるをえない状況になっていましたから、私がこの山行きを取り止めるわけにはいかないのでありました。

この事情は説明したものの、何としても返事に困り、即答を避け、「先ずおじいさんの枕経を先に、皆さんもここに集まって念仏なさい」と話して、回向を始めました。来迎の阿弥陀様のお指図をいたぐ思いがあり、考える時間をとの気持ちでした。

剃度、三層三竟と仏弟子とする作法をし、お顔を拝しながらお念仏を称え始めました。すると、おじいさんの面倒を最後まで見ていてくれたお嫁さんの、「二十五日に葬儀をし

てもらわなければ……皆さんに迷惑をかける。……困るわ、おじいさん、和尚さんになんとかお願いして」と、悲痛とも思える声が聞こえてきました。

すでに亡くなっている故人に頼んでも、何も言うはずもないにもかかわらず、お嫁さんは、二度、三度繰り返すのです。

そのとき、いつの間にか私には、お嫁さんの声が音松翁の声のように聞こえ、「和尚、何とぞ頼むわい」と言われているように聞こえてくるのです。

私はお念仏を納め、向き直りざま一同に、「二十五日葬儀を行う」と言つてしまいました。その瞬間には山行きのことは全く頭から抜けてしまっていました。

すると、喪主をはじめ居合わせた親戚の人から、「和尚、大丈夫か」と、正されたのです。が、「今お念仏を称えておりましたら、これはおじいさんからの願いと思うから、二十五日に葬儀の予定で準備して下さい」と、あらためて言つてしまい、居合わせた者も「それは

ありがたい、助かる」と早速準備が進められました。

翌二十四日は唐松岳登山の日、私も先達として参加。早朝五時半一行四十三名の貸切バスは予定通り出発しました。白馬山麓、ゴンドラ駅に着いた時、昨日の山は雨で大荒れ、足止めされた人たちも大勢待っていました。

八方尾根でゴンドラを降り、リフトに乗り継ぎ、歩き始めた時は朝露も消え、これほどすがすがしい山歩きは経験したことがない好天候です。二年後のオリンピック競技用にと新設された、世界に誇るジャンプ台をはるか左の眼下にし、三六〇度の眺めの広がる尾根歩きは、登った人でなければ味わえないすばらしさ、満足感で、一気に頂上近くまでたどり着き、またおにぎりの昼食は、下界では味わえない醍醐味でした。

二、三の雪渓を越し、山荘に着き、皆を停めて、私は偵察のため疲れの少ない三人を伴い一気に山頂に立ち、しばし天下取りの気分を味わいました。

すぐ来た道を下り、夜の宿の山小屋に待つ皆に頂上の様子を伝えました。ここまで来ればもう危険も少なく心配もない。大きな責任の荷が下りたので、みんなの士気に影響が出てはと思つて誰にも言わなかったことを伝えました。

「明日細井音松翁の葬儀のため、どうしても今日中に寺に帰らなければならない」と。

「それは大変なことだ」とか、「これから帰るには時間的に無理だ」とか、「電車がないのではないか」とか、「疲れていて大丈夫か」と、皆で心配してくれましたが、何としても今日中に帰らなければならないからと、後の責任はTさんをお願いして、一目散に山を下りました。

時間的にはきつい制限がありましたが、登って来たばかりの道でしたから不安もなく、無事ゴンドラ最終の時間に間に合い、JRの白馬駅についた時はあたりは真っ暗く、駅はひっそり、足どりもよたよたでした。

駅員さんが窓口に立っておられたので、篠

ノ井駅に行く方法を尋ねたところ、四〇分程後の特急新宿行きに乗れば、途中松本駅で乗り換え、待ち時間があまりないが長野行きに乗れるので、それで篠ノ井駅で下りなさいと親切に教えてくれました。

やれやれと特急電車に乗りこみました。休みなしの一日中の山歩きの疲れが一度に出、眠気におそわれましたが、松本での乗り換えがあるので眠ってゆくわけにもゆかず、音松翁との約束を思い、気を入れてお念仏を称え、眠気をおさえて乗り換えを待ちました。

予定通り松本駅に到着。ところが電車のドアが開きません。しばらくすると車内放送で、「増結車両の連結器の故障のためしばらくお待ち下さい」とのこと。数分後ようやくドアが開き、階段を駆け上がり、長野行きのホームに降りてゆくと列車が入ってきました。

ちやうど機関士さんが顔を出してくれたので、「この列車が長野行きですか」と尋ねると、「これは次の明科駅止りです。長野行きは

今出て入れ替わりに入ったところです」とのこと。困ったな、どうしたものかと思案していると、その機関士さんは降りて行ってしましうし、仕方なく次の電車に乗るしかないなと時刻表を見上げていると、先程の機関士さんがわざわざ来てくれ、駅長室へ相談に行ってくれということです。最終電車までにはまだ何本もあるのでそれにするというのに、是非駅長室へ行ってくれと頼まれ、重く痛む足を引きずりながら駅長室を訪ねました。

「貴方ですか篠ノ井駅へ行かれる方は。乗る継ぎの電車が事情を考えず定刻に出発してしまい、大変申し訳ございません」と言いながら、駅長さんはあちこちに電話していました。しばらくして「良かった、良かった、次の特急電車に乗って下さい」とうれしそうに言うのです。私も先程時刻表を見た時、次に来る特急電車は篠ノ井駅を通過して長野駅まで行ってしまうが、それ以外にないと思っていたので、「それでは特急券を下さい」と言うのと、「とんでもない、特急券はいりませんし、こ

の列車を篠ノ井駅に臨時停車させます」と言うのです。長野駅から篠ノ井駅に引き返す適当な列車がなく大変迷惑を掛けるのでそのようにしたと言ってくれました。

「長野駅からタクシーに乗っても帰れますから」と言ったのですが、「こちらの不手際ですので、次の特急電車のすいている席に座って下さい」とのこと。この特別な計らいに御礼を言って、間もなく来た電車に乗りました。

車掌さんが見えたので、特急券のない事情を話そうとすると、逆に「ご迷惑をお掛けしました。篠ノ井駅に臨時停車致しますので、お知らせに來ますからどうぞ休んでいって下さい」と親切極まりない対応でした。

篠ノ井駅で降りたのはもちろん私一人。まるでお召し列車に乗った気分て改札口に行くとき、「ご迷惑をお掛けしました」と駅員さんに頭を下げられ、ありがたく感謝しながら、家からの迎いの車で、予定していた鈍行の接続列車とさほど違わず帰寺できたのです。

迎えの車の中で、今日の山行きと白馬駅か

らの帰りの一部始終を話すと、運転している妻は、あっさり「国鉄がJRに変わってサービスが良くなったね」といとも簡単にかたづけられてしまい、これにはがっかりするやら、いささかむかつく思いまでしてしまいました。

妻は亡き細井音松翁が国鉄に三十数年勤続し、晩年には蒸気機関車機構改造発明で表彰を受け、昭和五十年には勲六等、藍綬褒章の榮に輝き、国鉄OB会川中島地区会長を務めるなど、国鉄マンのお手本ともいえる人であることも知らず、又私が細井翁の葬儀のために、一日中歩き通して尽力し、一日繰り上げて帰って来た本意を私程に感じていなかった事実を認めても、JRのサービス精神向上だけに片づけられてしまったことは、実に残念でなりません。

更に付け加えたいことに、細井翁は大変信心深く熱心な念仏者で、最近では健康であった点もあって、高齢者の模範的存在の方でした。

実際白馬駅で疲れて足を引きずって歩いて

いたためでしょうが、駅員の方が切符を買って来て下さった事。松本駅で乗り継ぎ列車が発車してしまっていた時、運転中の機関士さんが駅長さんに連絡を取ってくれたり、私一人のために駅長さんが本気で特急列車を臨時停車させてくれた事、車中の車掌さんや、篠ノ井駅の改札でお詫びや親切な言葉をもらうなど、全く普通では考えられない、この一つ一つに私は、元国鉄マンの細井音松翁が山頂より付き添って来て下さって、全てうまく行くように計らって下さったと思いたい気持ちと、熱心な念仏信者の細井音松翁を迎えに来て下さった阿弥陀様の御加護がなかったら、こんな好都合はありえなかったのではないかと今でも思われてなりません。

枕経で葬儀の日取りを決めかねていた時、音松翁の顔を拝しながらお念仏を称えているうちに、翁その人からの願いが耳に聞こえたように思いましたが、今思うとそれは、お迎えに来て下さった阿弥陀様のお指図ではなかったか。あの時、お念仏を申して阿弥陀様に

おまかせし、おすがりしなかったら、こんな多くの親切な計らいを、私が受ける事はなかったと思うのです。

死後どのようにして阿弥陀様にお連れ頂いて極楽に生まれさせてもらうかは、考えたことはありませんが、法然上人のみ教えのまさに、本願の念仏を申して、必ず来迎往生させて頂けると信じてきました。今日の山頂からの一、一の出来事は、多くの人々の善意と努力のお陰であつた事は事実としても、万事は細井音松翁が迎えに来て下さった阿弥陀様にお願ひし、それに応えての阿弥陀様のお計らいではなかったろうかと感得致しております。そうでなかったら、次々とこんなに有り難く事が運び、成就する事はなかったと思われるのです。

七月二十五日蓮香寺本堂にて、音松翁の葬儀を深い感謝の中に厳修したのであります。

(長野市川中島・蓮香寺住職)

表紙は語る

野草花ごよみ

12月

キジョラン

(ガガイモ科)

鬼女蘭。常緑樹林内にはえる、大形で光沢のある葉のつる植物。花は小さく目立たないが、大きい袋形の果実をつける。熟すると、真中が裂け、タンポポの冠毛のような毛をつけた種子をのぞかせる(写真がその状態)。やがて種子は風に乗って散って行く。名は、種子の毛を鬼女の白髪に見立てたことによる。

撮影場所 東京都高尾山



もうひと花

カンアオイ (ウマノスズクサ科)

山の樹林の下にはえる多年草。冬花を咲かせる花は半ば地中に埋れていて花粉はアリが媒介する。葉の形、花の色等変異が多い。この植物は高尾山に多いが、この植物を食草とするキフチョウはいない。

撮影場所 東京都高尾山

お詫びと訂正 11月号の「もうひと花・キチジョウソウ」の写真の向きが誤っていました。光の当たっている右側が上部です。謹しんでお詫びと訂正をさせていただきます。

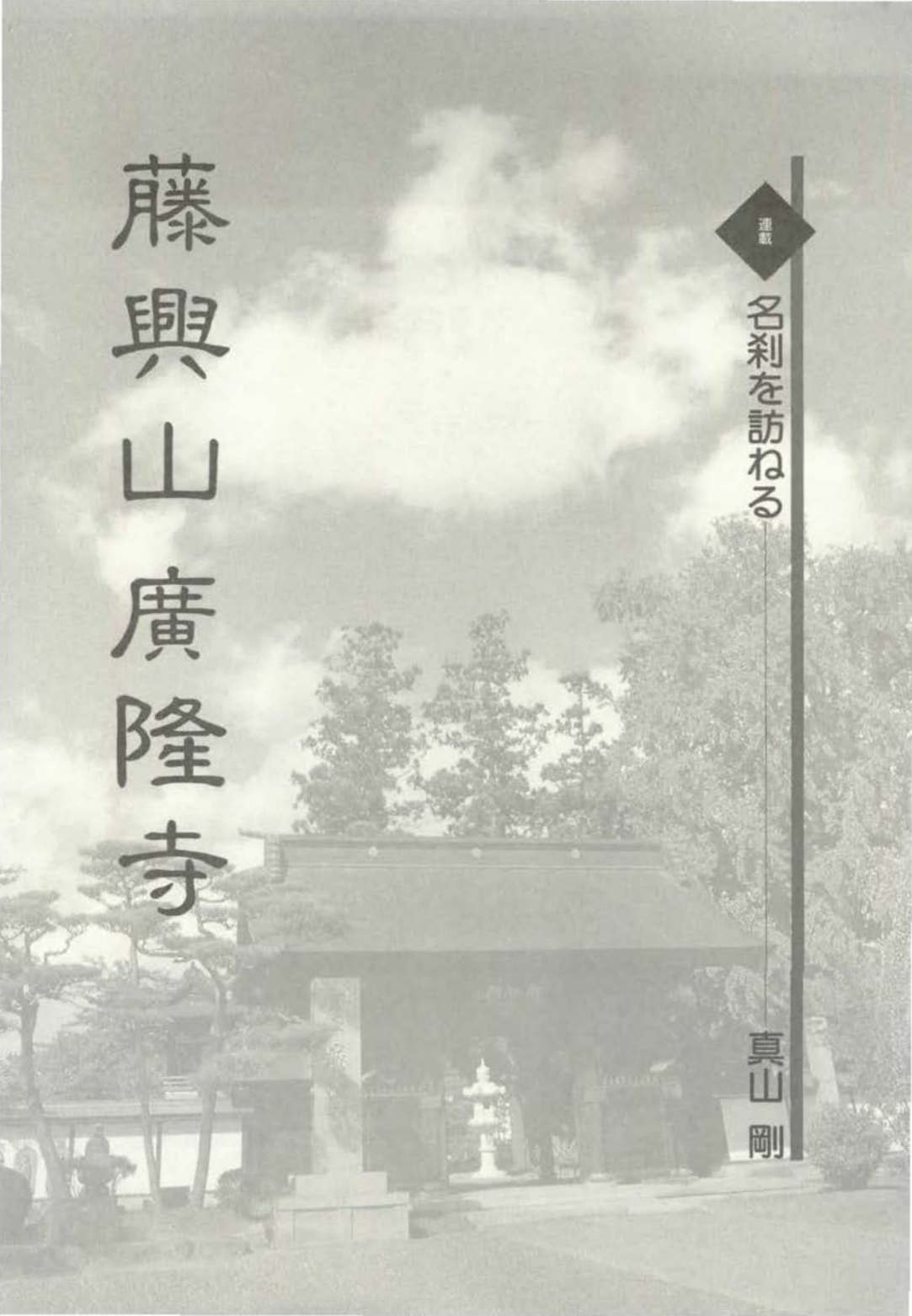
表紙Photo/Report
石井敏之

連載

名刹を訪ねる

真山剛

藤興山廣隆寺





「伝ではあるのですが、法然上人が自ら彫った勢至像です」を岩手弁で言うと、どうなるのかは覚えていないが、廣隆寺第四十二世光蓮社頭譽玄雅上人は見事な岩手弁で、こう説明してくれた。

その岩手弁が見事な岩手弁かどうかは、東京育ちのわたしには実によくわからないのだが、優しさと穏やかさと、そしてちよつとはにかみを含んだその一言で今回の取材は始まった。

「花巻は 湯のまち 詩のまち 花のまち」とは地元出身の宮沢賢治の生誕百年で、全国からの観光客で沸いている岩手県花巻市の観光キヤッチフレーズだが、その花巻市には浄土宗のお寺が三つある。廣隆寺、松庵寺、勝行院の三か寺だ。だが松庵寺と勝行院はもとほ廣隆寺の末寺、末庵であったというから、つまり岩手県花巻市の浄土宗寺院といえば廣隆寺、ということになる。

住職が見せてくれた廣隆寺の寺史にはこの他にも末寺と末庵の記録が残っていて、そこには末寺三か寺、末庵五か寺の名前が連なっていた。岩手県には三十余の浄土寺院があるが、この廣隆寺はその規模、歴史からみても岩手を代表する名刹なのである。前号の東京本所回向院の取材で開帳というお寺の行事にふれ、なかでも出開帳では信州善光寺の善光寺如来が有名だったと書いたが、この廣隆寺でも一七五〇年前後に二回の信州善光寺の出開帳があった。このこ



本堂の前の前に法然上人幼少の頃の像が経つ

とからでも廣隆寺の寺格がうかがえる。

今月はこの岩手の古刹を訪れた。

伝 法然上人自作勢至像を見せていただいたあとに、これも法然上人御真筆の「南無阿弥陀仏」という六字の番号を見せていただいた。高さ二十センチ前後の小さな、しかしとても細工の行き届いた厨子にその番号は納まっていた。仏の字の下に源空、法然上人の名前、そして花押が並ぶ。

住職は今度も気さくに「これも真偽はわかりませんが、でもうちのお寺の宝ものです」とやはり飾り気がない。

素朴、と言ってしまえばそれまでなのかもしれないが、その一言では片付けられない暖かさがある。こういう和尚——住職より和尚の方が似合うのでこう呼ばせていたが——こういう和尚に面倒を見てもらえるお檀家さんは幸せだろうな、と思った。

廣隆寺は正式名匠を藤興山長寿院廣隆寺（とうこうざん ちようじゆいん こうりゆうじ）という。この寺の略記はこう始まる。

「三門内境内には樹齡六〇七百年と推定される大公孫樹が寺の歴史を物語るかのように聳えている」

開創が一二九三年（明徳四年）というこの古刹の縁起はこう続く。

「法然上人の弟子石垣金光上人が師命をうけて浄土教宣の爲め東北地方巡錫の砌り、下似内村（現花巻市宮野目下似内）の真言寮に



かつて廣隆寺の末庵だった勝行院の重文、阿弥陀三尊

錫^{しやく}を止めて此の地方の人々に念仏の法門を勧化した。以来此の寮は当地方念仏信仰の中心道場となって栄えていたが、その後約百五十年程経た頃、下野国(茨城県)の僧良間上人^{りやまきん}が金光上人の遺跡を慕って此の寮に止住し近隣の信を集めていた。時の領主稗貫大和守の子廣隆忠廣の二人共に良間上人に深く帰依し教えをうけていたが明徳四年二月(一二三三)廣隆は病を得て没す。領主その菩提を弔わん為めその寺域を現在地に定め一字^{いちじ}を建立し、浄土宗奥州総本山磐城の専称寺に請うてその末寺となり、廣隆の名をとって廣隆寺と称し、又稗貫家は藤原氏の故を以てその興隆を祈って藤興山と号し、現在に至っている。この所以により、金光上人を開祖とし、良間上人を開山と仰いでいる。往時は領主の帰依寺であつたために従本山方丈寺の格式を許されたことが寺旧記に残っている」

というのが廣隆寺の歴史だが、ここに出てくる福島県の専称寺の開山はこの廣隆寺の開山の翌年である。とはいえ廣隆寺が専称寺の末寺であることには変わりがないし、専称寺は東北を代表する浄土宗のお寺には違いないのだが、ちょっと面白い歴史だ。

こうした六百年を越える歴史を見守り続けてきたのが境内の大公孫樹だが、この大公孫樹にとっても、そして和尚にとっても、そして和尚の奥さんにとっても残念な出来事があつた。昭和三十三年から続いていた日曜学校の閉校である。現在の和尚、谷地玄雅住職が

寺宝の十王図（地獄図十幅）



このお寺を継いだのが昭和五十七年で住職歴十四年というから、先代の住職が始めた日曜学校だが、当時結婚間もない谷地玄雅現住職と奥様の興子さんもこの日曜学校の先生をしていた。

近所の幼稚園から小学生までの子どもたちを集めて、毎週日曜日にいろいろな事をしてきたという。興子さんは岩手曹洞宗のお寺に生まれたお母さんに育てられ、浄土宗のお寺にお嫁に來たのだが、中学校の技術・家庭科の先生のキャリアを活かし、子どもたちに版画やエッチングなどを教えていた。現和尚は童話を読んだり、遠足に連れていったりした。それこそ日曜日は近所の子どもたちが廣隆寺の境内を跳びはねていたという。

そして平成元年には花巻市の画廊で日曜学校の作品展を開き、岩手日報にも大きく取り上げられた。また三十年も続けていると、かつての卒業生の子どもも入学してくる。こうなると親子二代の生徒さんだ。これほど思い出の多いこの日曜学校を閉校せざるを得なくなったのは、子どもの減少が理由だという。少子化は全国津々浦々にまで及んでいる。

しかし何もこの日曜学校だけが近所の人たちとの交流行事ではない。これもやはり三十年続いている新入学祝いの集いは春の彼岸の中日に小学校新一年生を集めて行われる。親や兄弟が見守る中可愛い新一年生が順番にご本尊の前に出て、和尚さんから元気で健やか

廣隆寺本堂



に育つようにとお祝いのお清めをしてもらう。とてもほほえましい行事だ。

こうした子どもの行事の他にも、十一月には十夜という行事から引き続き廣隆寺の文化祭が始まる。縫い物や生け花、習字、絵画、短歌など多くの作品が廣隆寺の廊下や客殿せましと飾られる。おじいちゃん、おばあちゃんからお父さんお母さん、そして子どもまで家族で参加し楽しめる行事だ。

そして今年で二十二年目を迎える廣隆寺和順婦人会。毎年行なわれる小旅行はもう岩手県内をほとんど巡ってしまいい県外へという活発さだ。

この他にもお寺の行事は目白押しで、いつもお寺はにぎわっている。取材で訪れた時も、玄関わきの住職の執務部屋にはご婦人がいらっしやって、奥様も交え楽しそうなお話しの最中だった。何か、みんなのお寺、気軽に遊びにいけるお寺という和やかさが漂っている。執務部屋というよりはみんなの居間というべきだろう。

この連載でいくつものお寺にお伺いしたが、こんな雰囲気は初めてだった。もしかすると、こういうのが田舎のお寺、というものかもしれないが、何かお寺の原点を見ているような気がした。

和尚さんに聞いてみた。

「いえ、先代が昭和四十年から体調をくずす昭和四十七年まで知恩



廣隆寺第四十二世頭堂玄雅住職

院の布教部長をしていたのですが、当時は今のように副住職制度がなくて、ただの留守番だったのですが、その時にいろいろと学びました。また当時の本山を中心とした活動に随分と刺激されました。いま思うと、先代が客殿や鐘樓の整備をしたりして、いろいろな下地を作ってくれたんだな、と感謝の気持ちでいっぱいです」

昭和十年にここ花巻で生を受けた和尚は最初から最後まで、本当に氣さくてにこやかだ。和尚さんには二人の息子さんがいる。お寺にいる長男と浄土宗のハワイ別院にいる次男の二人だ。

奥さんは「どこか次男が入れるようなお寺がないものですかね」と少々心配のようすが、なにかこれ以上望むのは贅沢では、と思えるような、そんななごやかなお寺だった。

(ルポライター)

《お詫びと訂正》本誌十月号「名刺を訪ねる」の21ページ7行目に真言宗は天台宗の誤りでした。読者並びに関係者の皆様にご迷惑をおかけしたことを深くお詫び申し上げます。訂正させていただきます。

衆議院選挙が終わった。投票率は六十パーセントを割り、これまでの最低という。

無関心とか、政治不信とか、政策にたいした違いがないとか、また、選挙制度がおかしいとか、その理由がいろいろ言われている。どれも一理も二理もあるだろう。そんなことで腹を立てていたら、この国で新聞の政治面など読んでいられない。

それよりも腹が立つのは、選挙が終わった後に、どこかのテレビ局が行った選挙民へのアン

ケートの結果である。選挙前にとの党も公約にあげていた「行政改革」にたいして、「できるだろう」と答えた人は一割強で、「できないだろう」と答えた人が半数以上だった。

「はか、ふざけたことぬかすな。あんたたち何考えているんだ」

「できないだろう」なんて思わずに、公約にあげた以上、しっかりとやるように監視するのが選挙民のつとめである。最初から諦めていては、できるもの

⑤にしろ加減にいい

もできなくなる。もし、私が議員だったら、この回答をみて、「期待されていないものを、することはない」と聞き直つてみたくなる。

経済は一流、政治は三流といわれる日本の政治。これはとりも直さず、日本国民の政治意識が三流ということである。いっそのこと、政治家たちが好き勝手なことをして、日本をためにしたほうが、人々の政治意識をたかめるための治療には早いかもしれない。

(順)

おかげさまで

410
周年

伝統が支える
信用と技術



松井建設株式会社

本社 東京都中央区新川一丁目二番二号 TEL(03)3553-1151
東京支店 東京都中央区新川一丁目二番二号 TEL(03)3553-1151
支店 大阪・名古屋・北陸・北海道・東北・九州・横浜

御法語に聴く

たとへば父母の慈悲は、善き子をも、悪しき子をも育めども、善き子をば悦び、悪しき子をば歎くがごとし。仏は一切衆生を哀れみて、善きをも、悪しきをも渡し給へども、善人を見ては悦び、悪人を見ては悲しみ給へる也。

『念仏往生義』

たとえば父母のあたたかい慈悲の心は、善い子も、悪い子も同じように養い育むけれども、善い子を喜び、悪い子を歎かれることとしてしよう。それと同じように阿弥陀さまも、すべての人を別け隔てなくお浄土へ迎えて下さいますが、善人を見てはお喜びになり、悪人を見てはお悲しみになるでしょう。

仏の心と人の心

十二月。師走^{しわす}、一年の締めくくりの月となりました。一年の締め

くくりといえ、除夜の鐘^{かね}が思い出されます。

除夜の鐘は人々^{ひと}がもつ百八の煩惱^{ぼんごう}を除く夜の鐘、と広く伝えられています。一撞^{ひとつ}き、一撞きの鐘の音とともに、一年間に積み重ねてきた罪・咎^{とが}を除き、新たな心、清浄^{しょうじやう}な身で新年を迎えさせてくれます。そして、「二年の計は元旦にあり」の言葉通りに、仏さまのお示しになられた道に精進^{しょうじん}し、よりお念仏に励む生活に邁進^{まいしん}したいものです。

けれども、「三日坊主」という言葉があるように、恥ずかしながら私は、そうした「計」は長続きせず、次第々々に煩惱を積み重ね、ふたたび除夜の鐘を神妙に聞く、という年を繰り返しています。次の句は、そんな心持ちを歌ってくれているかのようです。

約束の ひとつ果たせず 除夜の鐘 (昭子)

法然上人も人々の心のありようについてこんな歌を残されています。

池の水 人の心に 似たりけり

濁り澄むこと 定めなければ

法然上人のご精進と私ごときの「計」とでは比べべきもありませんが、法然上人は、日本仏教史上において、人々が生まれながらに持っているどうしようもないこの心、性をしっかりと見つめられた初めてのお方です。思うに性とは、近年研究が進み、広く知られるようになった「利己的遺伝子」と非常に近い関係のようです。生まれながらに私たちは、個や遺伝子の保存という至上命題を予め課せられているので、煩悩を根っこから絶つことはたいへん難しく、それに引きづられながら生活してしまうお互いのようです。

もちろん法然上人は、人の心のそうしたありさまをご承知の上で、阿弥陀さまの真心を読みとられ、冒頭に示したお言葉のようにおっしゃられています。阿弥陀さまは、私たち一人々々をお育ていただいた両親が、まさにその幼な子を慈しむような真心を持って、善人は悦びながら、そしてたとえ悪人であっても、それを悲しみ歎かれながら、共に分け隔てなくしっかりと抱きすくめられ、決して離すまいとなさることでしょう。なんと有り難く、なんと尊いみ心でありましょうか。

私たちは、日々のお念仏を通じて、そんな優しく慈しみ深い仏さ

まのみ心に触れられたならば、自分自身の心の姿をも見つめ直さずにはいられなくなることでしよう。そして、法然上人の『一紙小消息』にある「罪は十悪五逆の者も生まると信じて、少罪をも犯さじと思うべし」のお示し通り、至らない心を自覚しながらも、仏さまのみ心を悲しませず、お嘆きにならないような日暮らしを自然と心がけることとなるでしょう。除夜の鐘は、私たちの煩悩を除いてくれると共に、あらゆる人をお救い下さる阿弥陀さまのみ心を響かせてくれているのかも知れません。

法然上人が眠る浄土宗総本山知恩院は、京都東山にあります。その鐘は、高さ三・三メートル、直系二・七メートルで日本最大の鐘といわれています。今年もまた、その鐘の重厚で長い響きが、過ぎ去る年を振り返りつつ、新年を迎える厳肅な気持ちにあらためてひたらせてくれることでしょう。

除夜の鐘 鳴り終りたる 東山 (北人)

合掌。

(浄土宗総合研究所研究員・林田康順)

うまい野菜と



料理の話②

あるいは

セ
ッ
ツ
エ
ー
バ
タ
ケ

自家菜園の

ひそかな

愉しみ

我田大

今年はキノコが早い。彼岸の中日に下見というか偵察のつもりで山に行ったら、もうウラベニホテイシメジが出ていた。それもゾロゾロと。例年より一週間か十日は早い。もうラッカシ（腐り）かかっているのもあった。ポケットに五つ六つつこんでいったスーパ一のポリ袋が足りなくなるほど出ていた。ので、こまったり、うれしかったり。最初からこんなじゃね、ちよつと、のぼせていけないというかね。

キノコとりには、どのくらいとれるかとれないかわからないから、袋はいつも余計に持つて行くのだが、アテがいいほうに外れた。ま今回はようやく足りて、着ているジャンパーを脱いで入れてくるほどじゃなかった、残念ながら……。

家に帰って計ったら十二kgばかりあった。久々の大収穫だ。どうりで重かった。スネの筋肉も痛くなった。前日の雨で湿っている

道無き林の中や急な細い山道を、両手に重い袋を下げたヤジロベエ姿勢の爪先下がりて下りて来たせいだ。

えー、最近は都会生活者が多いし田舎にいても山に行かない人も多いから、山道と書けばさうとう整備されたのを想像する人が多いらしい。で、細い山道をケモノミチなんて表現しているのをよくみかける。でも人間の作った道とケモノミチは、明らかに違う。道は、一見そうとは見えなくても、通る人間は、それを辿るとある目的地に到達するのを知っているから、道なのだと私は思う。どこにいくかわからないが外見は道というのをケモノミチというのだと思う。林の中を歩く（この歩く経験も、舗装された道を歩くのとは大違いなのですが）というか移動する時は、通りやすいところを選んでするのは動物も同じだろうから、大型動物が多ければそういうのができることはあると思う。また偶然それらしき

のができることもあるだろう。でも山の道も知らないヨソモノがこれはケモノミチなんていうことは、リクツからいってできるはずがない。登山でヤブコギの苦勞をしたことのある人なら、たとえ今は整備不十分で草や灌木が生い茂っているやつとの道でも、道というだけの有難味はよくわかるでしょう。

道草が長くなった。で、まあそういうケモノミチといわれそうな道を、草が生い茂って地面が見えないところをヤジロベエで一步一步神経を使って下りてきたのだ。でも足を置く場所をいちいち確かめてというわけではない。草の種類や状態から地面の状態を推測してはいるが本当のところはよくわからないことを「足の裏に目をつけて」リズムよく下りてきた。なにかあったらすぐ対応できるようにとは思っている。でも予想が外れたり気をぬいたり、何回か転んでしまった。見えないうちに足をとられたり、濡れた踏み固められ

た土で滑ったりで。これは吹雪や霧の中でスキーをしている時の感覚に近いと、今思う。

転んだ時はリクツでは「滑って転んで」なのですが、意識としては決してそうじゃない。アツと思ってから体が停止し意識が戻るまでの短い時間はわけがわからない。停止によって「私は転んでいる」とのニンシキがくる。

そこからさかのぼって滑ったことを覚るのだ。ふだんずつとあるとおもっている意識は、こういう時には働いていないものらしい。スキ―で転んだときもアツと思ってから止まるまで、どうなっているのかよくわからない。心は止まってくれと念じるばかり、動いている感覚があるだけです。ま、こんなことはどうってほどのことではないと思うのですが、転ぶたびになんか気になることはあります、私には。

また道草をした。山道下りだった。大収穫によって両手がふさがっていたから、木や草



実はまだ
頭には耳が
棲んでゐる



につかまるわけにはいかなかった。あらかじめも、滑った時にも。加えてキノコで重い袋によつて足に力も入り、敏捷さも減らされていた。だからゆつくりバランスをとつて下りてきた。が、転ぶ時はどうしようもなくなる。その時はズデーンと転ぶしかない。と、やつと転ぶところにもどつた。

キノコをいっぱいといったのはうれしいけど、転べばコンチクショオと思う。しかし転んでも、瞬間手を前につきだし、こわれやすいキノコにショックをあたえないようにしているのには、自分ながら、たいしたものという苦笑ものというか、です。

えーと、キノコ。標準和名ウラベニホテイシメジはキノコの傘の裏が紅色というか肉色です。はじめ白っぽいのがだんだん色が濃くなってくる。傘が開かないうちは柄の下部がふくれている。それを布袋様の下腹に見立てた名前だと思う。傘の表面は灰色から灰褐色

大きいのは柄の長さや傘の直径が二〇cmほどもある。これが林の中によきによきと生えているのを見つけ、とるのは私のキノコとりの楽しみの上位です。とつたという気がする重量感があります。まだ木々が落葉しないうちに出るので、薄暗い林床を下から透かしてみても白い茎を探します。したがって晴れて木もれ日がチラチラする日より曇った日のほうが見つけやすい。キノコとりや山菜とりの忘れてはならない鉄則「一本あつたらメグラ（まわり）をみる」と、また何本が見つかることが多いです。

これにはほんとによく似ているクサウラベニタケという毒キノコがあります。同じ場所に生えていることもあります。毎年中毒が報じられてもいます。ですからとる時にはよく注意して、疑わしきは捨てる勇気をもたなければなりません。

またウラベニホテイシメジは松茸などと同

じように、生きている木の根と共生している菌根性のキノコですから、栽培はこの先もちよつと不可能でしょう。今商品としての流通はほとんどないキノコだと思います。

あ、都会の人などが、ちよつと裏山に行けばによきによきとウラベニホテイシメジが生えていると誤解するといけない。こういうキノコは生える場所が決まっているのです。そこは広い広い山の特定一部なのです。私はまた年寄りからその場所を習ったのです。そしてそこでまずは驚喜してとつていた。そのうちにそういう林のなかでも、どういう所にするかをおぼえた。視線の動かし方をおぼえた。そこには言葉は介在していなかった。

最初は教えられた林全体をしらみつぶしに見ていった。が、じきにそうすることの非能率に気づいた。と言うより、しぜんにくたびれることはしなくなってきた。研究しに行っているのではないのだから、ないところ

を一生懸命探すことはないのだった。先の「一本あったらメグラを見る」のが効率いいのだった。考えてみればキノコが一本そこに生えているということは、そこらあたりがそのキノコにとつての好適地だということなのだから、メグラをよく探せばありやすいリクツなのだった。それをくり返すうちに、出ている場所に共通する雰囲気みたいなものを了解してきた目は、自動的にそれらしいところを探すようになった。また出ていそうな林、林相というか、も遠くから見てわかるようになった。おかしなものです。べつに私が命令するわけじゃありません。勝手にそう見えてしまうのです。

が、そういう手慣れてきた目も生えているキノコを一〇〇%発見することはありません。自分では全部とつて来たと思つても、それは見つけたものの全部でしかありません。必ずメノコシ（見残し）をします。次の日同じ所に

いくと自分が全部とったはずなのに、またいくつかはあります。ほんの足元に生えているのに見えないこともよくあります。ちよつとしたことで見つけて、なんで見つけれなかったか不思議なほどです。人間の認識なんてそんなもん、とか思わせられます。

とまあそういうシチメンドーな話はやめて食うほうだ。ウラベニホテイシメジはそのままでちよつと苦味があるので、家では一度



我田大（わがた・ひろし）
1947年新潟生まれ。東京都立
大学（社会人類学専攻）在学
中に、板前の修業をしたり、
雑誌「ガロ」周辺の人々と遊
んだりする。現在は六日町で
季節料理の店「大」を経営。
自家菜園では一般野菜からハ
ーブまで、幅広く栽培してい
る。
1994年、筑摩書房より、「野菜
がうまい」を上梓。注目を集
める。
「大」0257-72-4565

茹でこぼしてから塩漬けにしておきます。そ
して正月に塩抜きしてから煮物にして食べま
す。ハレの食べ物です。傘のニユルニユルも
だけど柄のシヨキシヨキがたまらないです。
いかにも貴重品といったふうでなく、大きな
井にごちやごちやつと山盛りにしたのをムシ
ヤムシヤ食う時にはまた、ズラツと生えてい
た景色や、ズックリととる手の感覚も思い出
されて、いいです。

千鳥足

街灯^{まちづ}寒々 はや師走

駄句をよんで洒落てみたところで、何の慰めにもなりませんし、平成八年が戻って来てくれるわけでもありませんが……。

今年もあとひと月を残すのみ。いよいよ押し迫って、今の皆さんの胸のうちはどんなでしょうか。残されたわずかな日数でやっしまわなければならないことに追われて（そうそう、まだ年賀状書きもありましたっけ）とてもそんなことを振り返る余裕などないかもしれません。

でも、ちょっと空いた時間に、または夜、床についてからでも、今年一年をもう一度思い起こしてみてはいかがでしょうか。反省すべき点や悔やまれることが

若和尚の

○ 二 其 し は い い ト ッ ヨ チ

幾つかあるうかと思えます。

「怠けていて気力もなく百年生きるよりは、一所懸命に勤め励んで一日生きるほうがすぐれている」（法句経一一二）

手厳しく感じられるお釈迦さまのお言葉です。何ということもなく、流れていく時間にただ漫然と身を任せていた日々はなかったでしょうか。振り返れば確かに一年は過ごしてきました。三六五日という時間を積み上げては来ましたが、それは今の言葉の中にあつた「怠けていて気力もなく」積み重ねた一年ではなかったか？ 毎日がそうではないにしても「一所懸命に勤め励んで」過ごした日数はどれほどあつたか？ 胸が痛くなる思いがします。

この一年を元旦に計じただけではありませんが、はじめから気負って、毎日勤め励んで一年間を過ごそうとしてもなかなか続けられるものではありません。

その遂行のためには、今日一日はどうだったか、明日一日をどうするか、実らせるかを意識するべきなのでしょう。その日々の積重ねが、結果的にすばらしい一年間を形作っていくのだと思います。

あみだぶと

十声称えてまどろまん
永き眠りと

なりもこそすれ

(宗祖御歌)

どうぞ、よいお年をお迎え下さい。
(正)

大室了皓師が答える

読者からの仏教相談

義姉から新興宗教への勧誘
どのようにならねばいいの…



二十九歳の主婦です。結婚三年目で、彼の両親と同居しています。

先日、実家に寄った時、この『浄土』を読ませていただき、私もいま困っていることを相談してみようとペンをとりました。ご指導お願いいたします。

困っていることは、義姉にある宗教に入らないかと誘われているのです。

その宗教とは、あの、輸血を拒否する宗教です。

義姉はすでに結婚していて、近所に住んでいるのですが、二日とあけずに家に来ては、数時間、義母や私と話をして帰っていきます。その中で、義母が席を立て、私と二人きりになると、「こんどどこで集まりがあるから、一緒にいきましょーよ」と誘うのです。

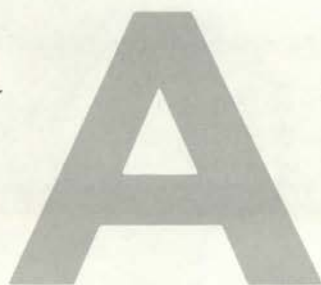
私にはこれといった信仰はありませんが、義姉の入っている宗教は、新聞などで見たこともあり、変な宗教だと思っています。夫に相談しても「うまく断れ」というだけで、義

姉に言っただけでくれません。

私思うに、その背景には、夫は幼い時から義姉にずいぶん可愛がられていること、また、義母も義姉と仲良く、彼女が家に来ることを楽しみにしていることで、義姉が家に来にくくなるようなことはないかと思ひます。また、義母は、義姉がそんな宗教に入っていることは知っていますが、彼女の自由にさせています。

義姉は、宗教のことさえなければ、とてもやさしく、いい人です。

なんとか、ことを荒立てずにうまく断る方法はないものでしょうか。義姉が家に来なくなれば義母も悲しむでしょうし、また、うまくいつている嫁姑の関係も気まづくなってしまうのではないかと、心配です。



どの宗教を信じるかは、個人の自由であることは良くご承知のことと存じます。

しかしながら、集団結婚式で波紋を投げた統一教会へ誘われ、入信した我が子を、脱会させようとして苦勞した親御さんたちの話を聞いておられることと存じます。

立派に成人した大事なお子さんを、教会へ奪われたと泣いた家庭が沢山ありました。

成人に達しているのですから、どの宗教を選んだとしても、ご本人の自由ではあるのですが、それが原因で大きなご両親や家族を泣かせるようなことになるような宗教は本物ではないと思います。

何故ならば、本物の宗教は宗派などの違いはあっても、自分だけではなく回りの人々をも幸せにすることを説いているからです。

オウム真理教に破防法の適用が決まり、解散命令が出されました。マスコミは連日に互り、裁判の模様を報じています。

現職の警察官が、警察庁の長官を射殺しよ

うとした事件が伝えられたことに衝撃を受けた人は少なくありません。

信仰は自由だとしても、人々の幸せを願うべき宗教の本質を忘れて、自分の宗教の発展のためには、人殺しをも勧めるというようなものは邪教としか言いようがありません。

統一教会と同じように、巧みに信者にさせられた若者の親たちの中には、必死になって我が子の奪還運動を起こした多くの人達のことはご存じかと思えます。

マインドコントロールによって、洗脳された信者こそ、まず最初の被害者ではないかと、気の毒になります。全財産を寄付してしまつて行き所を無くした信者の人達はこれからどうするのでしょうか。教祖を恨んでも、自ら選んだ道ですから、自分の力で自分の責任において立ち直って行くしかないでしょう。

あなたが勧誘されている宗教は、キリスト教系のもですが、正統なキリスト教界からは異端とされているものです。

私の寺へも信者の方が、その教団の小冊子（三百円位）を売り込みに来ます。寺と知って来るとは、と驚いていましたら、知人のキリスト教会へもやって来ると言って、その牧師さんは憤慨していました。

それもほとんどの場合、女性が幼児を連れ質素な服装で売り込みに来ます。

寒い時などは、連れられている幼児が憐れになって、買ってあげることもありましたが、教えの内容がとても納得できるようなものはありませんので、一切断っています。次のような会話を交わすこともあります。

「貴女には神様が付いていますか」

と聞きますと相手は顔色を変え、返事ができせん。

「そうでしょうね。神様が付いているようには見受けられません。私には付いているんですよ」

「神様ですか」

「いや、仏様ですよ。お念仏を唱える人には

付いて下さるんですよ。貴女もお念仏を唱えてご覧なさい。仏様が付いて守って下さいますよ。是非そうしなさい。南無阿弥陀仏」
そこまで話すと、相手は黙って帰って行きます。

しかし、この人も「何十部か売って来い」
とノルマを課せられて苦労しているのかも、また誰かの巧みな口に乗せられて入信せざるを得なかった。そして浅はかだったと思い直し、脱会しようとしても幹部や同僚達の強い圧力に反抗できなくなつて自分の心が潰されていった哀れな人かもしれないと、気の毒にさえなります。

本物の宗教なら、入会は自由だし脱会もまた自由、あくまでも本人の意思を尊重して、脱会しようとする者の首に縄をつけて縛りつけようとするなど、決して致しません。

いま世間を騒がせているオウム真理教は脱会しようとする者には、麻酔薬のようなものをも使い、翻意しなければ平然と殺してしま



いましたね。

これらはみんな邪教です。

勧誘の時には、お金はかからないと偽り、入信の晩には多額のお金を奉納させる。そして教団の一部の人が潤う。そういう仕組みになっているのが少なくありません。

超能力が得られる、などと宣伝して人を集める宗教もまた信用ができません。

修行に入って得られないと、お金を納めさせて第二段階へ進ませます。効果がないと次へ、また次へ。大金を費やして後悔すると、「もう少しだから」と言われ、抜き差しならぬ状態にのめり込んでしまします。

超能力を持っている人などいいたいとは言いませんが、普通人ではまず不可能なことです。洗脳されているうちに、持つことができる錯覚してしまうのです。

創価学会もまた不可解な教団です。

日蓮正宗の「檀信徒の会」でありましたが不穏な会だとして、宗派から破門されてしま

いました。

他の宗教は全て邪教だ、お寺の檀家になっているとお寺からお金ばかり取られる、創価学会では僅かの会費だけ払えば良い、そして病氣も治り貧困から救われ、みんな幸せになれる、と勧められて入ってみたら、そのような利益も得られないばかりか、毎年七月頃になると、莫大な志納金を要求され困り果て、脱会しようとしたが執拗な圧力に負け、止められないで夫婦仲もおかしくなってしまうたという例も少なくありません。

以上長々と、私が納得できない宗教に就いて書きましたが、このことを良くご承知になつて、決断を下して下さい。

入会も自由、止めることも自由、それが大原則です。

止められなくて泥沼に、ということになれば、貴女ばかりでなく大切なご主人をも不幸にしてしまい、先々は家庭の破壊にまで進むかもしれません。

信仰は誰にも拘束されてはなりません。優しいお姉さんの誘いを断ることに苦勞されておられるそうですが、私ならつぎのようにするでしょう。

一、善意ある誘いと信じる。

二、集まりに行ってみる。

三、冷静に参加者や内容などを把握する。

(実際に見なければ分からないので)

四、脱会自由であり、集まりに関して納得できるかどうか。

五、もし納得できなかったら、

「折角誘って頂いたが・・」と穏やかに、しかし将来のことを頭において毅然と断る。

一時は辛いでしょうが、正念場です。お姉様だって、貴女の心の中に土足で入ることは決して許してはなりません。

ご縁のある方だから、と断り切れずに入信し、後悔している人が少なくありません。

ご主人も「断れ」と言われているそうです

から、お二人で一つになって対応されたらどうでしょうか。



続

午後の日差しの中で

思い遣り

吉川英明



自分の老眼に気づいて愕然としたのは、四十五、六のことだったろうか。

電車の中で、週刊誌を読んでいるうち、両腕を少し伸ばしてページを繰っている自分に気づいたのである。

それはごく自然な無意識の動作だったのだが、自分のその姿勢に気づいた瞬間のショックはかなり大きかった。

（あれ、俺も目が遠くなってきたのかな）

そう思い、目と誌面の距離をいろいろと変えてみると、確かに今し方無意識に保っていた距離、つまり、ちよつと腕を伸ばした距離が一番楽だ。まだ軽度だから、普通の距離でも読めないことはないのだが、それだと、意識して焦点を合わせる必要があるような感じで不自然なのである。

思わず唸って、雑誌を閉じた。

それまでも、ぼつぼつ白髪が出たり、階段を上がった後で息切れがしたり、いわゆる老化現象は、あちこちに現われてはいた。

しかし、それらは比較的ゆるやかにやって

きたので、こちらとしても、ま、この年ならこれくらいは仕方がないのだろうと、受け入れるのにあまり抵抗はなかった。

だが、この場合は違った。

もちろん眼の老化も、しばらく前からゆつくりと忍び寄ってきていたのだろうが、はつと気がついた時には、

（いつのまにか、俺も老眼になっていたのだ）という感じで、唐突に老いを通告された気がしたのだ。

雑誌を閉じて腕を組み、目を閉じると、

（うーん、老眼か……）

と、改めて感慨が湧いてくる。

それは、尾を引いていた残暑が過ぎて、夏もそろそろ終わるのかなと悠長に構えていたある朝、吹きすぎた風が残っていた落ち葉を見た時などに、ふつと心をよぎる感慨にも似たものだった。

人生の秋は老眼で知ることかという、諦めを交えた淋しさなのだ。

それに老眼という名前も気に障る。老いた

眼、である。

自分がそうなるつい四、五年前、四十代も初めのころまでは、老眼などは本当に年をとってからなるもので、まだまだ先のことさ高を括っていたのだから。

そのシヨックをその日の午後会った五、六歳年上の友人に話したら、彼は、

「お前もとうとう、これか……」

と、腕を一杯に伸ばし、顔を引いて新聞を読む格好をした。

「ま、とうとう俺達の仲間入りをしたってわけだ」

そう言つて笑つたが、私にはその笑いが、ざまを見ろと言っているように聞こえた。

知らなかったうちはよかったのだが、老眼と気がついてからはどうにも気になり、眼鏡屋へ行って検眼した。

まだ軽いが、やはり眼鏡をかけた方が眼が疲れず楽だという。その場で眼鏡を作らされた。

数日後、出来上がった眼鏡を受け取って地下鉄に乗り、早速夕刊を広げた。

老眼と知って、このところ腐っていたにもかかわらず、新しい眼鏡を試したくて、夕刊を広げる気持ちがいそいそとしているのが自分でも分かつて不思議だった。

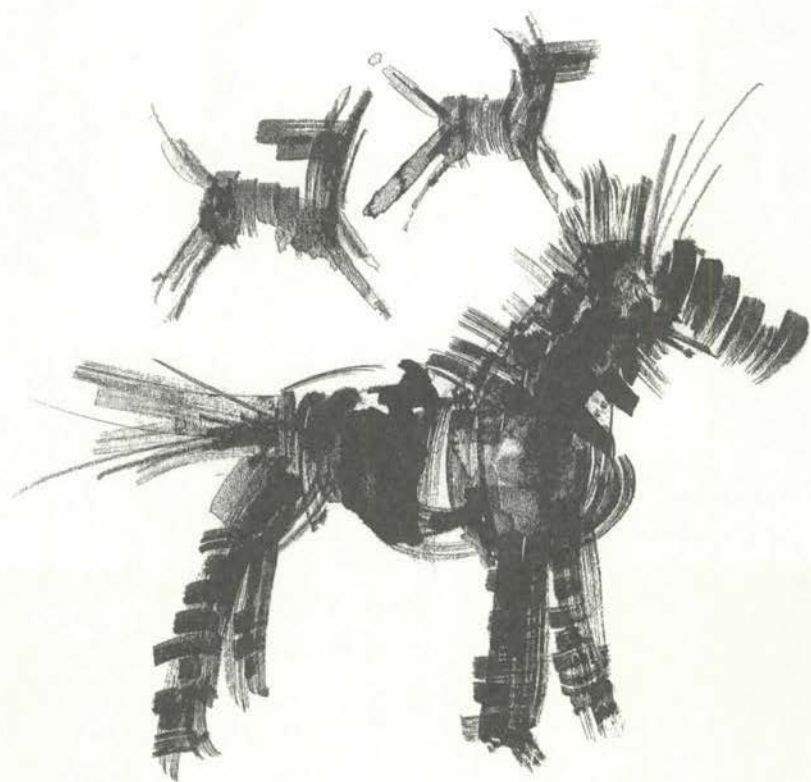
やはり、よく見える。活字の一つ一つが、大きくくつきりと浮き上がって、紙面の明るさまで増したような感じだった。

あまりの変化に嬉しくなったが、同時に、待てよ……と思った。

若かった二十代、三十代のころは、眼鏡をかけなくても、新聞や雑誌がこんな風に見えるのだろうか？

思い返してみると、確かにそうだった。三十代になつてからはいざ知らず、学校を出たての二十代のころは、本や新聞雑誌の紙面が今より明るく、新鮮に見えていた。

恐らく、眼の老化は二十代のころから、それと分からぬほど緩慢に進んでいたのだろう。それが、少なくとも見えただけは、一挙に



イラスト・平野 稔

二十年も若返ることが出来たのだ。

とすれば、眼鏡も悪くない。

眼鏡を胸のポケットにしまうと、何か新しい可能性を懐にしたような気になって、気持ち明るかった。

だが、慣れというものは恐ろしい。

あれから、十数年、老眼が進むにつれて二度ほど眼鏡を作り替えたが、最初に眼鏡をかけてみた時のような驚きも感激も今はない。

紙面は別に明るくもならないし、活字は読めるが、あの時のように浮き上がって見えるほど新鮮でもない。

眼鏡をかけた時に見える世界が、当たり前になってしまったのである。

それに、やはり何といっても不自由だ。

近ごろは、眼鏡がないとまったく手も足も出ないくせに、時々、持って出るのを忘れる。どこかに置き忘れて失くしたこともあった。

今では、常に持って歩いている遠近両用のものが一つ、書斎の机に置きっぱなしにしてある老眼専用が一つ、念のための予備が一つ

と、合計三つの眼鏡を持っている。

それほど、眼鏡が失くなった時のことを思うと不安なのである。

そして、最近つくづく、こういうものは、そうなってみないと本当の不便さは分からないものなのだと思う。

この間もあるゴルフ場の洗面所で、鏡の前に並んだ化粧品のどれがヘアートニックで、どれがアフターシェーブ・ローションだかが分からない。もちろん表示はあるのだが、字が小さくて、どんなに腕を伸ばそうが、照明の近くへ持っていったって光を当てようが読めないのである。

とうとう仕方なく、隣で髪を乾かしていた若い人に助けてもらった。

まったく年を取ったものかわいと嘆かわしくなったが、そこでふと、私のよく行くゴルフ場では、化粧品のラベルの上に、黒のマジックインクで「顔」とか「頭」と大きく書いて丸でかこんであるのに思い当たった。

日ごろその恩恵に浴しながら、つい慣れっ

こになって何とも思わなかったのだが、困ってみると、その有り難みがよく分かった。

だが、若いころ私は、その黒のマジックの表示をみて、みっともないことをするものと苦々しく思ったこともあったのだ。

折角の洒落たデザインの上のラベルの上に、何でわざわざ黒マジックで無粋な文字を書きつける必要があるのか。アフターシェーブとか、ヘアートニックとかいう英文の表示が読めない人がいるのだろうかと思わしかった。

読めない人がいたのだ。老眼の人達、今の私がまさにそれである。

年取ってそうなるまで、初めてそのことの意味が分かったのだ。

考えてみると、若くて物を知らず、経験もないころということが、いかに不遜であることか。

化粧品の無粋な表示以外にも、書籍や辞書や新聞などが、活字の大きさを売り物にする、私は馬鹿にした。

活字を大きくするなんて無駄なことだ。小

さくすれば同じスペースに沢山の情報詰め込めるのに……と思つたものだった。

だが、最近そうなるまで、すべてが背ける。

ぎっくり腰を患って、その痛みを味わうと、昔、バスから降りるのに手間取って後ろで苛々させられたお婆さんの背中を思い出すし、レストランの隣の席で、ぜいぜいと咳き込んで、汚い爺さんと我らの席から白い眼を向けられた老人の顔も、自分に最近喘息の気が出てきてみると、身につまされる。やつと最近、思い遣りというものが、分かっていたような気がするのだ。

そうになると、わがままなもので、世の中まだまだ思い遣りが足りないと思いたくなる。

例えば、薬の瓶の説明書き……夜中に咳き込んだりして、さて何錠飲んだらよかったのかと、瓶に貼ってある説明書きを明かりにかざすが、この字の細かいことこの上もない。電灯の光ぐらいでは、眼鏡をかけても判読に苦勞する。

また、J・Rの乗車券売機……普通の人は何の不満もないかもしれないが、私は赤緑色弱である。硬貨を入れると黒いボタンに細い赤字で料金が表示されるが、あれが見えにくい。ボタンの表面が汚れていたり、ちよつと強めの光が当たっていたりすると、判読できなくなってしまうのだ。

日本には、約三百万人の色盲色弱者がいるという。料金表示の文字の色をブルーとか黄色とか、見易い色にして欲しいと思つているのは私だけではない筈だ。

等々と、自分に都合のいいことばかり考えていた矢先、新聞でぎよつとするような文章に出会った。

ある女性がコラムで、

「私達女性が、薄色の服を着ていて、一番悩むのが、おそばやラーメンの汁のはねた染みです」

と書いていた。そして、汁のはねるのは、そばをすすめる時が一番多いのだという。

そのために、一度そばをレンゲの上に受け

てある程度汁を切り、それからおもむろに口に運ぶのだという。

以前、私はこの頁で、最近若い女性がそばやラーメンをレンゲに乗せてから食べているが、あれは見えていてもまずそうて気色が悪いと書いたことがあった。

あれが気取っているからばかりでなく、汁の飛ぶのを防ぐためだとはつゆ知らなかった。その身になってみなければ分からないことである。知らないで物事を批判するのは恐いことだと、思い知らされた。

だが、考えてみれば、汁の飛ぶのが嫌だったら、ハンカチをエプロン代わりにかければいい。

やっぱりそばやラーメンは、たっぷりした汁の中から、ずるずるとすすり上げた方がうまそうに見えるし、事実うまいのだ。

(了)

「野球の醍醐味」とか、「スキ
ーの醍醐味」と、ものごとの真
骨頂を醍醐味と表現します。こ
の醍醐味という言葉も、実は仏
教の経典から出た言葉です。

醍醐というのは、牛乳を精製
したときにできる乳製品のうち
で、最後に出てくる最上の味の
ものをさします。「涅槃經」によ
ると、牛乳の味は精製すると次
第に深まって、五段階に味が変
わると説かれています。それを
五味といい、順に乳味・酪味・
生酥味・熟酥味・醍醐味である

とし、第五番目の醍醐味が最高
の味であり、そしてそれを心の
最高の境地である涅槃にたとえ
ているのです。

醍醐の原語は、サルピス・マ
ンダといい、サルピスだけでも
醍醐と漢訳されていることもあ
ります。ここまで言えばもうお
わかりでしょうが、乳酸飲料の
あのカルピスの名称は、このサ
ルピスに由来し、故渡辺海旭上
人が命名したことは有名です。
五味がそれぞれどのような状
態のものをさしているのかをみ

醍醐味

だいごみ

ますと、(1)乳は、牛乳そのまま
をさし、(2)酪は、ヨーグルト状
のものをさし、(3)生酥は、フレ
ッシュ・バターのようなものを
さし、(4)熟酥は、現在インド料
理で使う「ギー」(バター状の乳
脂)をさし、(5)醍醐は、(4)より
さらに純粋なバター状の製品を
さすといわれています。

悟りの最高の境地である涅槃
を表現する方法として、人々に
とって最も身近な食物の味を例
にとつたのは、すばらしいたと
えであると思います。

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎六一五 京都市右京区

西京極南衣手町七四

(株)島津法衣佛具店

☎〇七五―三一四―七七六八

FAX〇七五―三一五―三七五三

庭の規子

等大畑

病床六尺、これが我世界である。しかも此六尺の病床が余には広過ぎるのである。僅かに手を延ばして畳に触れる事はあるが、蒲団の外へまで足を延ばして体をくつろぐ事も出来ない。甚だしい時は極端の苦痛に苦しめられて五分も一寸も体の動けない事がある。

(「病床六尺」)

この病床から眺める庭が子規の天地であった。子規に『小園の記』という小文がある。

我に二十坪の小園あり。園は家の南にありて上野の杉を垣の外に控えたり。場末の家まばらに建てられたれば青空は庭外に広がりにて雲行き鳥翔る様もいとゆたかに眺めらる。

または友人知人の無造作な手によるものとなる。

一三日ありて向かひの家より貰ひ来たりとて肥え太りたる鶏頭四本ばかり植え添へたり。其つぐの日なりけん。朝まだきに裏戸を叩く声あり。戸を開けば不折子が大きな葉鶏頭一本引きさげて来りしなりけり。朝霧に濡れつゝ手づから植ゑて去りぬ。

このように、小園は子規にとって眺めるだけのものであった。野分が来れば来たて、人が来れば来たて、為されるように為される庭であった。したがって手のかかる草花や珍しい草花が育つはずもない。つまり身近な草花に満たされることとなる。この小園の図を前にして彼の写生文についての言及を読むと、実に子規の思いが浮き彫りにされる。

写生の作を見ると、一寸浅薄のやうに見えるても、深く味わへば味ふ程変化が多く趣味が深い。(略)理想といふやつは一呼吸に屋根の上飛び上^あがらうとして却て池の中に落ち込むやうな事が多い。写生は平淡である代りに、さる仕損ひは無いのである。さうして平淡の中に至味を寓するものに至つては、其妙実に言う可からざるものがある。

(病床六尺)

「平淡の中に至味を寓するもの」として小園の草花はあった。そしてこの小園から

鶏頭の十四五本もありぬべし

が生まれるのである。そしてこの句のその後のいきさつを山本健吉は『現代俳句』(角川文庫)に次のように書いている。

およそ子規の俳句でこの句ぐらい議論の対

象となった作品はほかにはないのである。これは明治三十三年、子規庵における病床の句であって、当時の俳人たちには簡単に見過ごされていたのであった。(略)

この句の最初の発見者は、子規門の中でも繊細の精神の所有者であった歌人長塚節である。「この句がわかる俳人は今はいまい」などと茂吉に言ったという。そしてこの句の真価を世人に認識せしめたのは茂吉の『竜馬談話』であった。一方、虚子が新たに編纂した

岩波文庫版『子規句集』(昭和十六年刊)には、二千三百六句も選んだ中に、相変わらずこの句がはいっていない。驚くべき頑迷な拒否である。

(続く)

注、「病床六尺」「小園の記」は「日本現代文学全集・講談社版」6「正岡子規集」による。

浄土宗総本山知恩院御用達

豊田愛山堂老舗

薫香
線香
經典
念珠

※地方発送受賜ります。

京都・祇園

TEL(075)551-2221番代
FAX(075)525-1806番

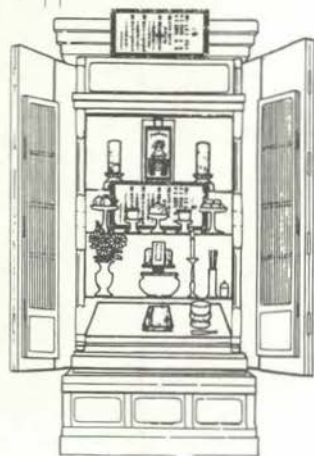
好評
発売中
!!

お寺から檀信徒へ

宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。
菩提寺とその宗旨がいつも
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大（32.0×18.3cm）721円／小（27.3×14.2cm）412円

注文・問合せは
法然上人鑽仰会

〒105 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内
電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

ＴＶウォッチング、紀行文その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

イベント便り

藤木芳清

(貞源寺)

ご縁あって、お能の囃子方、大鼓の大倉流宗家・大倉止之助さんと、薩摩琵琶、錦心流中谷派裏水会主宰・荒井姿水さんの演奏会を、十月二十七日に、私が住職を勤める貞源寺本堂に於いて行わせていただいた。

大鼓の独奏は勿論のこと、薩摩琵琶も、今の時代ではあまり馴染みがあるとは思えないこともあり、どれくらいの方々にお出でいただけるか、それだけが気がかりだったが、檀信徒の方々を中心に七十数名の方にお出でいただけたのは本当に有難かった。

演奏会は、大倉止之助さんの『三番三』で幕を開け、荒井姿水さんの『耳なし芳一』で第一部を終了。二十分の休憩の後、お二人の共演で『巴』が始まる頃には、晩秋らしく空気が澄み渡り、満月が中天に輝き、絶好の雰囲気を作り出していた。

『耳なし芳一』は、小泉八雲の怪談でお馴染みの話、『巴』は平家物語第十「木曾最期」に登場する巴御前の話。能の演目にもあるためだろうか、息の合った、しかも荒井さんが長年ご愛用のばちを折ってしまったほどの熱演に、演奏にお出で下さった皆さんは、充

分に堪能された様子だった。

『巴』の熱演には、この演奏会に、お二人共通の思いがあったからではないかと、私は思わずにはおれなかった。

それは、お二人共通のご友人で、私もよく存じ上げている横浜のTさんが、二十五日に癌で突然亡くなられ、演奏会の前日に通夜、当日にはご葬儀が行われていたのだ。

しかも、その方は、この演奏会に荒井さんと一緒にみえるはずだった。

「横浜からこちらまで来る間、ずっと隣にTさんが居るような気がしていました」
演奏会始まる前、荒井さんは控え室で私にそういわれた。

おみえになる予定だったことは、大倉さんも勿論ご存知のこと。

客席に、その方が居らっしゃるような想いが、お二人にあったのではないかと、私には、そのように感じられた。

この演奏会当日は、何かそうした流れが続いていたように感じられる。

当山では、毎年十月の最終日曜日に歸敬式を行っており、当日も昼頃から歸敬式を行い、

夕刻から演奏会を行うという日程だった。

歸敬式の後で、京都からお出でいただいた日下部謙旨上人にご法話をいただいたが、諸行無常、いつ何時死が訪れるか判らないというお話だった。

私は、演奏会の当日、荒井さんからお聞きするまで、Tさんが亡くなられたことを知らなかった。だから、当然日下部上人にも、演奏会にみえるはずの方が亡くなられたという話しはしていない。

歸敬式での御法話としてはやや重い、「死」そのものをテーマとしてご法話されるには、日下部上人なりの理由がおりになったのだろうか……。

荒井さんと演目のご相談をし、『耳なし芳一』に決まった一週間ほど後、九州で活躍なさっていた盲僧琵琶を継承するお二人が、今年相次いで亡くなられたことを知った。

三月九日に世田谷の日本民芸館で行われた演奏会の折りに貞源寺で演奏していただく依頼をし、日程を決めたのだが、その三日後の九月十二日に、生涯檀家の家を廻り、般若心経などのお経、いわば純粹に佛教音楽として

の琵琶を演奏し続けた大分の高木清玄さんが亡くなられた。そして六月二十四日最後の琵琶法師、熊本山鹿良之さんが。

ご存知の通り、『耳なし芳一』は平家の亡霊にとりつかれた盲僧琵琶の名手の話。

「そのような形で行う予定ではありませんが、図らずもお二人の追悼演奏会のようにになりましたね」

電話で、姿水さんとそんな話をした二日後に、Tさんが亡くなられた。

こうした事実を、殊更のようにつなぎあわせ、何か特別な意味を持たせようとは思わないが、それでも、寺の本堂で、阿彌陀如来の御前で演奏会を行うというこの意味を、強く感じさせられた一日だった。

演奏会の後、控室で、大倉さん荒井さんと雑談をしているとき、だれが言い出すともなく、Tさんの初七日に当たる十月三十一日にお焼香に伺わせていただくことに決まった。

誌上俳壇

天神の鷗尾の金色十三夜

風や姉の病を問ふ受話器

来し方を母と語りて彼岸かな

子を抱けばひなたの白ひ落葉踏む

紅葉が里にくだりて秋深し

一葉落ち又一葉落ち木は細り

児玉仁良（埼玉県入間市）

よし乃（東京都文京区）

山岡啓子（東京都港区）

久かたに孫の声きく明夜かな

気ぜわしやつるべ落しの秋の暮

嵐去り大きな橋よ秋の虹

病む老妻に若き面影秋の夜

草虱児が持ち来たり仏の間

反骨の僧も老いたり十夜寺

若葉
(東京都中央区)

帆祐
(東京都中央区)

佐藤雅子
(山形県上山市)

くぐもりて柞紅葉の茶屋明り

庭雀紙貼らずある骨障子

木洩れ日の雨情の旧居小鳥殖ゆ

湧水にたゆたふ今朝の紅葉かな

松本厚子（東京都町田市）

内堀綾子（東京都小平市）

吉野法衣店

各大本山御用達浄土宗袈裟法衣専門



〒160 東京都新宿区南元町17
TEL 03-3355-2168
振替 東京21176372

事務局便り

事務局便り

●J・FORUM（浄土フォーラム）

ご好評を頂いております、皆様のためのコーナー（J・FORUM）。毎月、投句、投稿を頂いておりますが、編集部ではもともとたくさんの方の作品を、お待ちしております。短歌や俳句、書評随筆や詩、身近な出来事や情報など、先的要領でどんどん応募ください。私たち編集部では、読者の皆さんと一緒に、この「浄土」をより楽しく、すばらしいものにしていきたいと考えております。

1 随筆・歌など…四百字詰め原稿用紙十枚以内
2 俳句・短歌・川柳など…二首まで
3 その他、本誌の体裁や掲載記事に対するご意見やご感想など、何なりと気軽にお聞かせ下さい。

……適宜

タイトルは自由です。投稿は随時受け付けておりますが、採否に関しては編集部にご一任下さい。また、原稿は返却いたしませんので必ずコピーをおとりの上お送り下さい。採用分については記念品を進呈いたします。

●読者アンケートのお願い

編集部では「浄土」のより一層の充実を図るために、皆様にアンケートをお願いしております。

1 十一月号でもっともよかった記事。

2 今後、掲載してもらいたい記事、希望する内容。

3 法然上人讃仰会の活動として望むこと。

4 その他、ご意見、ご感想など。官製はがきまたはFAXで事務局までお送り下さい。もれなく記念品を差し上げます。どうぞご協力お願いします。

（住所、氏名、電話番号をお忘れなく）

●新規会員紹介

購読会員

東京	江戸川	松崎 洋
東京	江戸川	米本 善男
東京	江戸川	宇田川 藤孝
東京	江戸川	宇田川 鐘彌
東京	江戸川	小池 清
東京	江戸川	中村 醇四郎



法螺貝を繰り返し吹き年詰る 岱潤

いつもこの編集後記をお読み頂いている読者ならば、先月号の『浄土』を読んでいて、驚かれ、愕然とされたことと思います。

そうです、お気づきのとおり、日常仏教語の原稿が、九月号と一緒だったのです。

このようなミスというのは、いくらなんでも初めて、気がついたとき私自身果然となり、血の気の引いた思いでした。とにかく大変な編集上のミス。心からおわび申し上げます。

そしてそのミス原稿が「法螺」だったというのが何ともお笑いで、真実の心を求め続けた法然上人様から、二度も法螺を吹いた私たちに、大目玉をいただきました。

今年も、あつと言う間に師走を迎えてしまいました。月刊誌は本当に慌ただしいものです。最近この『浄土』誌が、どんどん抹香臭くなっているというご意見を頂きます。きつと前の編集長からはお叱りを受けること必定です。でも、私はこれでいいと思っています。『浄土』という雑誌に期待するものの優先順位をあげてゆけば、法然上人に関わる文が一位にくることは決定していると思うからです。そして現代のように情報に氾濫し、テレビさえ多チャンネル化している時代、雑誌も専門化することを求められているように思うからです。

法然上人や仏教を表に出さないで、心を伝えるようにすることのほうがいいという意見もありますが、皆様はどうお考えになりますか。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

太田正孝

石上俊敦

佐山哲郎

編集協力

オフィス頼徳 佐山哲郎

編集顧問

大室了皓

浄土

六十二巻十二月号 頒価六百元

年間費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成八年十一月二十五日
発行——平成八年十二月一日

発行人兼編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社 平文社

写真植字——株式会社 シンタイ

〒一〇五 東京都港区六本木四一七一四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三三二五七八六九四七

FAX〇三三二五七八七〇三六

monthly 1000 1996.12 発行人兼編集人・宮林昭彦 編集チーフ・長谷川岱樹



シママがあることで、あなたに生活にどんな感動と満足が生まれるだろう。私たちは今、大きな自信を持って話します。技術を知り、性能に安否せず、あなたも存続して、これぞシママの乗り心地を楽しんでいただける。あなたがシママに理想として求めていることが、このどのシママで実現できる。すみずみまで「シマソンの最高」にふさわしい仕上り。風格と脚感。ひとたび走り始めれば、そこにはもっと深い魅力が待っています。シママ/シママ/あなたの熱い賞賛の声が続きます。日本車初。全車、SR5エアロパッド標準装備。運転席・助手席に装着。側面衝突時の胸部に当たる衝撃を緩和します。また速化した4.14V8エンジン搭載。シママのために開発。優越感あふれる街角が、滑らかで力強い加速を生み出す。



Photo: ショータイム41L.Vボディーカラーゴールドブローン(ジュビロホワイト)内(P)(#4S9-特別限定型)本車はシートはメカカーボン・全長4970×全幅1820×全高1445(mm)●エンジンV6 4130cc
TWINCAM●最高出力270ps(6000rpm/55kgf)最大トルク38.4(kgfm)/4000rpm●駆動方式手前SRXと手後SRXとデュアルドライブ●運転モード選択SRXスウィッチ●ABS(5チャンネル)
ステアリング●オーディオ・V-TCSS●AVコンパス(TV視聴時)●運転モードボタン●ナビゲーションシステム ●一部車両に搭載。シマのたままは、近江のローカル・カメラマンが撮影した写真

スピードおさえて、いい運転。
シートベルトをしめましょう。

LIFE TOGETHER
 NISSAN

人間のやさしさをタルマに。

法然上人讃仰会・発行



夏だ。冬だ。 ノドは。



冬は寒くても、雪にまみれても、僕らはアツイ
アツイから、渴いている
スポーツの汗、火の熱、恋の汗……
冬が来ても、夏みたいなカラッカラの僕のノドに、冬物語
スカッと爽やかな味が、雪のようにノドをすへる
カラタカ、シンと入るおっつけいく
冬だけの生ビールサッポロ 冬物語。今冬も通年と一緒
さあ今年は、誰とどんな物語？

★SAPPORO
冬物語

THE WINTER'S TALE

サッポロビール株式会社

ビールは、20歳になってから、あきかんはリサイクルへ。

ご協力のお蔭で、自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。

